

金目川水系で 出会った野鳥たち



目 次

はじめに	1
言葉の意味	1
本文	2
鳥名の索引	20
多く出会えた鳥の日数グラフ	21
2015年に多く会えた野鳥の総羽数グラフ	21
掲載した野鳥の大きさ比較グラフ	22
おわりに	裏表紙

金目川水系流域ネットワーク

<http://www.asahigs.co.jp/kaname-net/>

はじめに

金目川水系流域ネットワークでは、金目川が持っている豊かな自然を学び、守っていく活動に取り組んできています。

この小冊子は、金目川水系において、最近3年間に出会った野鳥たち(83種)を紹介する目的で作成しました。毎朝、川沿いを散歩した時に撮影した写真と、一部、金目川流域に出かけた時も含めています。従って、川沿いの平地が中心で、どなたでも運がよければ出会える野鳥ばかりです。まれにしか会えない野鳥は、その旨を記載しました。もちろん、単純に筆者が会えなかった、良い写真が撮れなかった(イワツバメ)、などの理由で、他の野鳥にも会える可能性はあります。

写真の説明にある、[夏]、[冬]、[年間]などは、この地域で姿を見ることができた時期を示していて、いわゆる「夏鳥」等の意味ではありません。一年中暮らしている鳥も、夏は葉が茂っていて姿を見ることが難しく、冬になって見ることができた場合もあります。

[鳥の科名]・(鳥の大きさ)(共に「フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂新版 日本野鳥の会(2015)」に準拠)・撮影月(⑥など赤丸文字)も参考までに載せました。鳥の掲載順は上記ガイドに準じました。また、説明文は、一般の方が観察する際に役立つことを主眼としているため、学術的な正確さを追求してはしません。別途、図鑑等をご覧ください。野鳥に関する文責は筆者にあり、できるだけの努力はしたつもりですが、誤記等があったとしたら、全て、筆者の責任です。

この冊子をご覧になって、少しでも、野鳥に親しみを感じていただけたら、嬉しいかぎりです。なお、この冊子を作成するに至った経緯は、当ネットワークの機関誌である「せせらぎ通信」に、3回(41号～43号)にわたって連載した筆者の「金目川の野鳥」シリーズが好評だったことによります。興味があれば、下記のページもご覧下さい。[せせらぎ通信] 

<https://www.asahigs.co.jp/kaname-net/seseragi.html>

言葉の意味

- 留鳥(りゅうちょう)：一年中、同じ地域に住む鳥。
夏鳥(なつどり)：海外から春夏に日本に来て繁殖する渡り鳥。
冬鳥(ふゆどり)：海外から秋冬に越冬のため日本にやってくる渡り鳥。
旅鳥(たびどり)：渡りの際に日本を通過する渡り鳥。
漂鳥(ひょうちょう)：夏は山地などにおいて、冬に低地に降りてくる鳥。
♂：オス、♀：メス
夏羽：夏に見られる鳥の姿。一般に冬よりも鮮やかな羽の色をしている。
冬羽：冬に見られる鳥の姿。カモ類の♂は冬の方が鮮やかな色。
幼鳥：生まれてから成鳥になるまで。成鳥とは姿が異なることもある。
成鳥：成長によって外見が変化しないようになった鳥。



↑カンムリカイツブリ [カイツブリ科] (56cm)
「冬」。冬鳥。頭部に冠様の羽があり、中央がへこんで見える。金目川では珍しい。①



↑カイツブリ [カイツブリ科] (26cm)「年間」。留鳥。泳ぎが得意で魚を主食とする。すぐ潜ってしまい、しばらく浮かんでこない。⑪・⑫



↓カワウ [ウ科] (82cm)「年間」。留鳥。魚が主食で潜って魚を捕り、羽を乾かすために翼を広げる。時に片足で。首が白い個体は繁殖期。また、集団で狩りをすることもあり、サギ類が便乗することも多い。④



↑マガモ [カモ科淡水ガモ類] (59cm)「冬」。冬鳥。冬羽では、♂と♀とで外見が異なって見える。♀は目立たないが、♂の緑色は特徴的で観察する位置によっては青味や黒味を帯びることがある。草食性で水面近くの水草等を採るため、嘴を水中に入れていることも多い。⑪・⑫



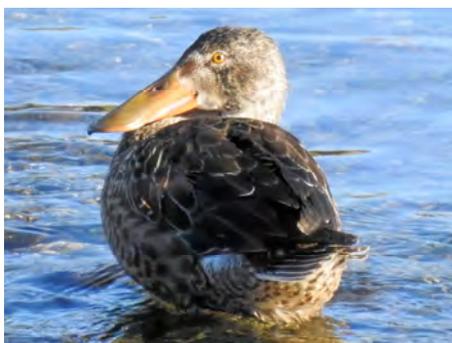
↑カルガモ: 伸びをしている⑨。説明は次ページ。



↑カルガモ [カモ科淡水ガモ類] (60.5cm)「年間」。留鳥。川でよく見られる。嘴の先端の黄色が特徴で、♂と♀とを外見で見分けるのは難しい。草食性で、陸上での採食もよく見る。上のアクロバット(?)写真では亀が迷惑そう。春には多くの雛を育てるが、下の写真では12羽を連れていた。⑩・⑤



↑コガモ [カモ科淡水ガモ類] (37.5cm)「冬」。冬鳥。日本への飛来時は♂も♀に似ているが、冬羽では外見が大きく異なる。♂は、頭部の茶色と緑色(光の加減で緑に見えない時もある)が目立つ。下は♀。カモ類では最も小さい。④・⑩



↑ハシビロガモ [カモ科淡水ガモ類] (♀43cm)「冬」。冬鳥。♂と♀とで外見・大きさが異なる。名のとおり嘴が幅広く水面付近の微生物を濾しとって食べる。澄んだ川に来ることは滅多になく、最近ほとんど見かけない。金目川が綺麗になった証拠。⑪



↑オシドリ:冬羽の♀(左)と♂(右)。②
説明は次ページで。
なお、金目川への飛来は少なく、適当な写真がなかったため、上の写真は市外で撮ったもの。



↑オシドリ [カモ科淡水ガモ類] (45cm)「冬」。冬鳥。冬羽では♂と♀とで外見が大きく異なり、♂は非常にカラフルである。上の写真は日本への飛来時初期の♀で、嘴が赤い他は♀によく似ている。⑩



↑ホシハジロ [カモ科海ガモ類] (45.5cm)「冬」。冬鳥。金目川水系では♂(写真)に、たまに会える。目の虹彩が真っ赤。⑩



↑オナガガモ [カモ科淡水ガモ類] (♀53cm)「冬」。冬鳥。冬羽では♂と♀とで外見が大きく異なり、♀(写真)は♂に比べて尾が短い。⑩



↑スズガモ [カモ科海ガモ類] (46.5cm)「冬」。冬鳥。金目川では一度だけ♀(写真)に会ったことがある。⑫



↑ヒドリガモ [カモ科淡水ガモ類] (48.5cm)「冬」。冬鳥。冬羽では♂と♀とで外見が大きく異なる。♂(写真)は、頭部の肌色と茶色が特徴的。群で行動することが多い。⑫



↑カワアイサ [カモ科アイサ類] (65cm)「冬」。冬鳥。♀(写真)が数日間、滞在していたことがある。落ち鮎をすごいスピードで追い、あっという間に飲み込んでいた。⑪



↑ウミネコ [カモメ科カモメ類] (45cm)。
留鳥。海岸ではよく見かけるが、川では一度だけ
会ったことがある。⑦



↑ササゴイ [サギ科] (52cm)。「夏」。夏鳥。翼の笹
模様から、この名がある。狩りの名人で、水辺で姿
勢を低くして待機し、素早く首を伸ばして魚を捕ま
える。⑧



↑ユリカモメ [カモメ科カモメ類] (41cm)。「冬」。冬
鳥。金目川では東雲橋あたりまで群れて飛んでく
る。成鳥(左)と幼鳥(右)が並んでいて、嘴や足の
色、翼の模様の違いが分かる。①



↑アカガシラサギ
[サギ科] (45cm)。
旅鳥。滅多に会え
ない珍しい鳥。夏
羽(上⑤)、冬羽(下
⑫)、に運良く一度
ずつ会ったことが
ある。



↑ゴイサギ [サギ科] (57.5cm)。「夏」。留鳥。夜行性
で留鳥だが、ここでは、夏の水辺の藪などに群で休
んでいることが多い。成鳥(左)と幼鳥(右)で羽の色・
模様が違い、幼鳥はホシゴイとも呼ばれる。③



↑アマサギ [サギ科] (50.5cm)。「夏」。夏鳥。亜麻
色の羽を持つ時期があることから、この名がある。ほ
とんど白い個体もあり、コサギより小さい。田園地帯
にいることが多く、昆虫、トカゲなどを食べる。⑦



↑しらさぎの仲間 [サギ科] [夏]。シラサギという鳥がいるわけではなく、白いサギの総称。平塚市の鳥でもある。左から、アマサギ、コサギ、チュウサギ、ダイサギと、奇しくも大きさの順に並んでくれた貴重な写真。(9)



↑チュウサギ [サギ科] (68.5cm)。[夏]。夏鳥。コサギより大きく、嘴は黄色で先端が黒味を帯びている。口角(嘴の付け根の切れ込み)が眼の真下まで止まるのが特徴。田畑で昆虫などを食べる。(9)



↑コサギ [サギ科] (61cm)。[年間]。留鳥。平塚市の鳥。一年中、嘴が黒く、足の指の黄色が特徴。春に指や嘴の付け根がピンク色(婚姻色)になることがある。群れで行動することもある。(8)・(11)

↑ダイサギ [サギ科] (80~104cm)。[年間]。留鳥。しらさぎ類では最大。魚が主食。凶鑑では夏の嘴は黒になっているが、ここでは、一年中黄色の個体も多い。なお、アオサギより大きい個体もある。(10)・(8) [稲田の写真の手前の鳥はチュウサギ]



↑アオサギ [サギ科] (95cm)。[年間]。留鳥。金目川では最大の鳥。単独行動が多く、ほぼ、毎日会うことができる。羽を乾かす姿(上の写真)は特徴的。川でじっと獲物を待っていることが多いが、鯉や蛙など大物をくわえていることもある。⑨・⑫



↑オオバン [クイナ科] (39cm)。[冬]。金目川では冬に見ることが多く、群れで行動することが普通。泳いでいることが多く、水中の水草を食べる。陸上にも上がって、草を食むこともある。嘴と額は白く見えるが、近くで見ると薄いピンク色。⑩



↑バン [クイナ科] (32.5cm)。[冬]。金目川では冬に見ることが多く単独か数羽で行動。横腹の白い模様が特徴的。水掻きはなく長い指を持っている。⑫



↑クイナ [クイナ科] (29cm)。[冬]。金目川では冬に見ることが多く、単独で行動、2羽以上で見ることが繁殖期以外ではまれ。警戒心が強く、姿を見せるのは短時間。指が長く、走るのも速い。⑫



↑コチドリ [チドリ科] (16cm)。[夏]。夏鳥。眼の周りの黄色が特徴的。走るのも速い。単独で行動することも多い。④



↑イカルチドリ [チドリ科] (20.5cm)。[冬]。留鳥。留鳥だが、ここでは冬に会えることが多い。群れで休んでいて、川原で動かないと石と見分けにくい。コチドリと似ているが同時に見たことはない。①



↑イソシギ [シギ科] (20cm)。[年間]。留鳥。単独で行動することが多い。常に尾を振りながら浅瀬や堤防下などを獲物をあさりながら移動している。⑩



↑タゲリ [チドリ科] (31.5cm)。[冬]。冬鳥。主に田園地帯に群れで飛来してくる。羽の色が光の加減でいろいろに変化して、美しい。⑫



↑キアシシギ [シギ科] (25.5cm)。[春]。旅鳥。足が黄色みを帯びている。春に1週間ほど、金目川に滞在して食事を摂り、また旅立ってゆく。⑤



↑ケリ [チドリ科] (35.5cm)。[冬]。冬鳥。タゲリ同様、主に田園地帯に群れで飛来してくる。タゲリより見かけることは少ない。⑫



↑タシギ [シギ科] (26cm)。[冬]。冬鳥。一度だけ、金目川で会ったことがある。③



↑ミサゴ [ミサゴ科] (♂58cm, ♀60cm)。[年間]。留鳥。上空から川に飛び込んで、大型の魚を捕らえ、足を交互にして獲物を抱え、飛び去ってゆく。

①・①



↑オオタカ: 幼鳥。⑧。説明は次ページで。

↓オオタカ: 成鳥。②・②。同上。



↑トビ [タカ科] (♂59cm, ♀69cm)。[年間]。留鳥。上空で食物を探して旋回していることが多い。近辺のタカ類では最大。カラス類と食物が重なるためか、カラス類によく追われている。③



↑ノスリ [タカ科] (♂52cm, ♀57cm)。[年間]。留鳥。樹に留まっている姿にもよく会える。腹部の茶色の帯模様が目立つ。②



←オオタカ [タカ科] (♂50cm, ♀57cm)。

[年間]。留鳥。幼鳥は全体に茶色っぽい。胸の模様は縦縞。幼鳥の存在は付近での繁殖を示している。成鳥は全体に灰色っぽく、胸の模様は横縞。周りの鳥からは恐れられているが、カラス類は群れで近づいて追い払おうとするためオオタカに気づくこともある。生態系の頂点にいるオオタカの存在は、金目川の生態系が豊かであることを示している。



↑ハヤブサ [ハヤブサ科] (♂41cm, ♀49cm)。

[年間]。留鳥。枝に留まっている姿には一度会えたのみ。飛んでいる鳥を獲物にする猛禽類。③



↑チョウゲンボウ [ハヤブサ科] (♂33cm, ♀39cm)。[年間]。留鳥。ハヤブサより小振り。田園地帯でも飛んでいる姿に会える。♂が求愛で、空中から♀に向かって何回も急降下するのに出会ったことがある。⑫

→アオバト [ハト科] (33cm)。[夏]。金目川では中々会えないが、大磯の照ヶ崎に群れで飛来する美しい鳥。♂(右)は翼があざき色。海水を飲みに来ることで有名。詳しいことは、こまたんのページでどうぞ。〔こまたん 検索Q〕。大磯町の鳥。⑨



↑アオバヅク [フクロウ科] (27~30.5cm)。[夏]。

夏鳥。神社などの古木で会えることがある。昼間は枝に留まって休んでいる。時々、目を開けることもある。カブトムシなどの昆虫も食べるようで、食べかすが地面に落ちていた。⑥



↑キジバト [ハト科] (33cm)。[年間]。留鳥。比較的、普通に見ることができる。首の筋模様が特徴。ドバトのように群れることはないが、冬は数羽の群れで樹に留まっていることもある。②





↑ドバト(カワラバト) [ハト科] (33cm)。[年間]。留鳥。人を恐れず、むしろ食べものを求めて人に寄ってくる。公園、神社、橋の手すりなどで、普通に見ることができる。単独ではなく、群れで行動する。②



↑カワセミ [カワセミ科] (17cm)。[年間]。留鳥。言わずと知れた溪流の宝石。チーッと鳴いて直線的に飛ぶので、慣れると金目川でも見つけることができる。魚採りの名人で、枝や空中(ホバリング)から、川などに飛び込んで魚やエビなどを捕まえる(1枚目⑩)。捕まえた魚は向きを変えて、頭の方から飲み込む。2枚目⑤の写真は、あくびをしているところ。3枚目①はペリット(魚の骨など消化できないものを体内で丸めたもの)を吐き出そうとしている。4枚目⑫は♀(下嘴が赤い・口紅と覚える)が伸びをしている。5枚目③は♂が♀に食べものをプレゼント。



←ホバリング(ヘリコプターのような停空飛行)で獲物を探す。①



↑アリスイ [キツツキ科] (17.5cm)。[冬]。漂鳥。まだ、二度しか会ったことはない。長い舌で蟻を捕食するため、この名があるという。鳥らしくない奇妙な模様をしている。③



↑コゲラ [キツツキ科] (15cm)。[年間]。留鳥。キツツキでは一番小さく、樹の中にいる昆虫を食べる。ギーと鳴くので見つけやすい。幹・枝を回りながら上に登ってゆく。爪が発達しているため逆さになることも厭わない。①



↑ヒバリ [ヒバリ科] (17cm)。[年間]。留鳥。川で見かけたことはなく丘陵の広い場所で見える。写真のように頭の羽を上げていることもある。春には、高い

ところでホバリングしながらさえずるので、声を目当てに見つけることができる。③



↑コシアカツバメ [ツバメ科] (18.5cm)。[夏]。夏鳥。その名の通り腰の部分が赤みを帯びている。⑧



↑ツバメ [ツバメ科] (17cm)。[夏]。夏鳥。春に渡ってきて日本で子育てをする代表的な鳥で、夏には虫を探して飛んでいる姿によく会える。1枚目⑥は巣材の泥を運んでいるところ。2枚目⑥は幼鳥に空中でトンボを与えている。↓次ページの写真は親が食物を運んでくるのを待っているところ。



↑ツバメ: 幼鳥。⑥。説明は前ページ。



↑キセキレイ [セキレイ科セキレイ類] (20cm)。[年間]。留鳥。セキレイの中では会える機会は少ない。川の上流に住むと言われる(清流の貴婦人)が、下流の花水川でも時々見かける。金目川が清流である証拠かもしれない。⑩



↑ハクセキレイ [セキレイ科セキレイ類] (21cm)。[年間]。留鳥。町中でもよく会える。目の下が白いのが特徴。気が強く他の鳥を追い払っているのをよく見かける。⑩



↑セグロセキレイ [セキレイ科セキレイ類] (21cm)。[年間]。留鳥。川辺でよく会える。目の下が黒いのが特徴。川ではハクセキレイをも追い払う。セキレイ類は鳴き声でも区別できる。①



↑ヒヨドリ [ヒヨドリ科] (27.5cm)。[年間]。留鳥。1年を通して、よく会える鳥。うるさいほど、大きな声で鳴く。柳の花や、桜の花・蜜を好み、特に桜の花期には、群れて集まってくる。⑩



↑モズ [モズ科] (20cm)。[冬]。漂鳥。上の写真⑩は♂(翼の白斑が特徴)。秋になると梢で大きな声で鳴く(高鳴き)。肉食ハンターで、昆虫やミミズを捕ま

え、鳥をも追いかける。恋の季節には、♂が♀の横で首振りダンスをして求愛する(下の写真)。^③



↑ヒレンジャク [レンジャク科] (17.5cm)。[冬]。冬鳥。川には柳の花芽を食べに一回のみ訪問。^③



↑キレンジャク [レンジャク科] (19.5cm)。[冬]。冬鳥。上記同様、川には柳の芽を食べに数羽で一回のみ。両者とも丘陵に群れでやってくるが、来ない年もあるようだ。尾の先端の色で区別可能。^③

↑ジョウビタキ [ヒタキ科小型ツグミ類] (14cm)。[冬]。冬鳥。♂(1枚目^②、灰色の頭が特徴)と♀(2枚目^①)とで姿が異なり、共に美しく、会えると嬉しくなる鳥。3枚目^①の写真はお見合いか?。4枚目^①は♀が虫を捕食しているところ。





↑ノビタキ [ヒタキ科小型ツグミ類] (13cm)。[秋]。夏鳥とされているが、会えたのは10月の数日間の冬羽の♀。渡りの前にたらふく食べていったのかもしれない。⑩



↑アカハラ [ヒタキ科大型ツグミ類] (23.5cm)。[冬]。漂鳥。胸がオレンジ色で、腹部下側は白色。茂みの中を鳴きながら移動することがある。シロハラに比べると開けた場所にも姿を現す。③



↑イソヒヨドリ [ヒタキ科イソヒヨドリ類] (25.5cm)。[年間]。留鳥。♂(上⑫)と♀(下②)とで姿がかなり違う。堤防や屋根などの建築物に留まることが多い。名の通り、海岸でも、町中でも会える。昆虫やトカゲなどを捕食する。縄張り意識が強いらしく、ほぼ一定の場所で見かけることが多い。



↑シロハラ [ヒタキ科大型ツグミ類] (24cm)。[冬]。[冬鳥]。茂みの暗いところを好む。この写真では、総合公園の芝生に出たところに会うことができた。②



↑ツグミ [ヒタキ科大型ツグミ類] (24cm)。[冬]。冬鳥。渡ってきた時は、樹に留まっていることが多いが、次第に草原や畑で見られるようになる。⑫



↑ウグイス [ウグイス科] (14~15.5cm)。[年間]。留鳥。春になると、梢などでさえずる姿に会えるようになる。普段は藪の中において姿を見ることは困難。チャッチャツという声で、その存在が分かる。**③・④**



↑シジュウカラ [シジュウカラ科] (14.5cm)。[年間]。留鳥。ジュクジュク、ツーピーなどと鳴く。群れで行動する時は見つけやすい。羽の様子は繊細で美しい。昆虫、木の実などを食べる。**⑫・⑪**



↑オオヨシキリ [ヨシキリ科] (18.5cm)。[夏]。夏鳥。ギョギョシという特徴的な声でいる場所が分かるが、姿を見ることは中々難しい。**⑨**



↑ヤマガラ [シジュウカラ科] (14cm)。[年間]。留鳥。金目川ではあまり見かけないが、丘陵や総合公園で会える。**③**



↑エナガ [エナガ科] (13.5cm)。[年間]。留鳥。群れで行動することが多い。尾が長いので、この大きさになっているが、身体は小さく動きが素早い。そのため、写真を撮るのは一苦労。とはいえ、とても可愛い鳥。②



↑ホオジロ [ホオジロ科] (16.5cm)。[冬]。漂鳥。頬の白さは名ほど目立つ広さではなく、胸が薄茶色なことが特徴。②



↑メジロ [メジロ科] (12cm)。[年間]。留鳥。掲載した鳥の中で一番小さい鳥。群れで行動することが多い。梅の花には、やはりメジロが似合う。名の通り、目の周りが真っ白。下の写真は巣立ち雛。ずんぐりしていて親と一緒にないとメジロとは思えない。②・⑥



↑カシラダカ [ホオジロ科] (15cm)。[冬]。冬鳥。写真のように頭の羽を立てていることから、この名が付いたようだが、立てていないこともあり、逆にホオジロが立てていることもある。ホオジロとの区別は、胸が白っぽいこと。群でいることも多い。⑩



↑アオジ [ホオジロ科] (16cm)。[冬]。漂鳥。チツと、か細く鳴く。草むらを移動していることが多い。黄緑色が目立って美しい。⑫



↑カワラヒワ [アトリ科] (14.5~16cm)。[年間]。留鳥。黄色の羽が目立つ。尾羽の逆M字が特徴で遠くからでも目安になる。綺麗な声で鳴く。②



↑イカル [アトリ科] (23cm)。[冬]。漂鳥。エノキの実を好む。嘴は先端がギザギザ。群で行動することが多い。さえずりは特徴的で聞き惚れる。③



↑マヒワ [アトリ科] (12.5cm)。[冬]。冬鳥。カラヒワより、さらに黄色の羽が飛んでいる時も目立つ。写真は♂。一度、50羽程度の大群が川辺に来て、アキノノゲシの実に群がったことがある。⑪



↑シメ [アトリ科] (18cm)。[冬]。エノキの実を好む。丘陵では群で行動することも多いが、川では単独行動が多い。⑫



↑ベニマシコ [アトリ科] (15cm)。[冬]。冬鳥。♀(写真)に一度だけ近くで会ったことがある。赤いのは♂の方。②



↑スズメ [スズメ科] (14.5cm)。[年間]。留鳥。ここでは、もっとも会う機会が多い鳥(21ページ参照)で会えない日はないといってもよいほど。頬が黒く羽模様は複雑で近くで見ると見事である。⑫



↑ムクドリ [ムクドリ科] (24cm)。[年間]。留鳥。ここでは、もっとも数が多い鳥。中州がねぐらになる時は、数千羽が集まる。嘴がオレンジ色で、飛んでいる時は腰が白いのが目立つ。③



↑コムクドリ [ムクドリ科] (19cm)。[春、秋]。旅鳥。春と秋に多数の群で金目川にしばらく滞在し旅立ってゆく。写真は♀。夕方、群で水浴びをする姿にも会える。ムクドリと行動を共にすることも多い。④



↑オナガ [カラス科] (36cm)。[年間]。留鳥。関西では見られない鳥。群で行動することが多く、梢に留まることが多い。姿の割に声は期待できない。③



↑ハシボンガラス [カラス科] (50cm)。[年間]。留鳥。鳴く時はお辞儀を繰り返す。水浴び以外で川で活動しているのは、こちらが多い。大きな石も足で踏ん張り、嘴で持ち上げて食べものを探す。⑨・⑩



↑ハシブトガラス [カラス科] (56.5cm)。[年間]。

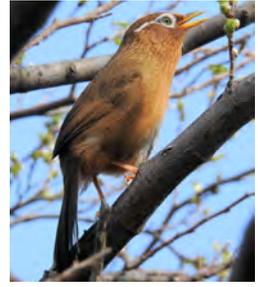
留鳥。カーのように澄んだ声で尾を振りながら鳴く。写真①→のように、おでこが見える時もある。巣では両親が揃って給餌す



ることもある
⑤。子育て中の鳥の巣へ近づくと厳禁。親鳥は非常警戒モード。雛が巣から落ちた時は親に守られながら元気に暮らしていた⑥↑。



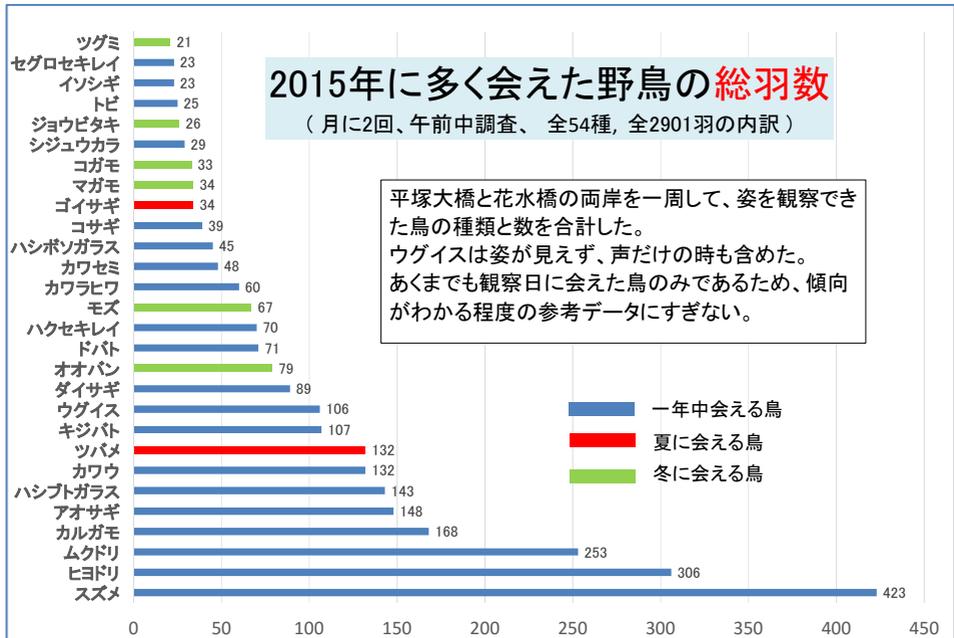
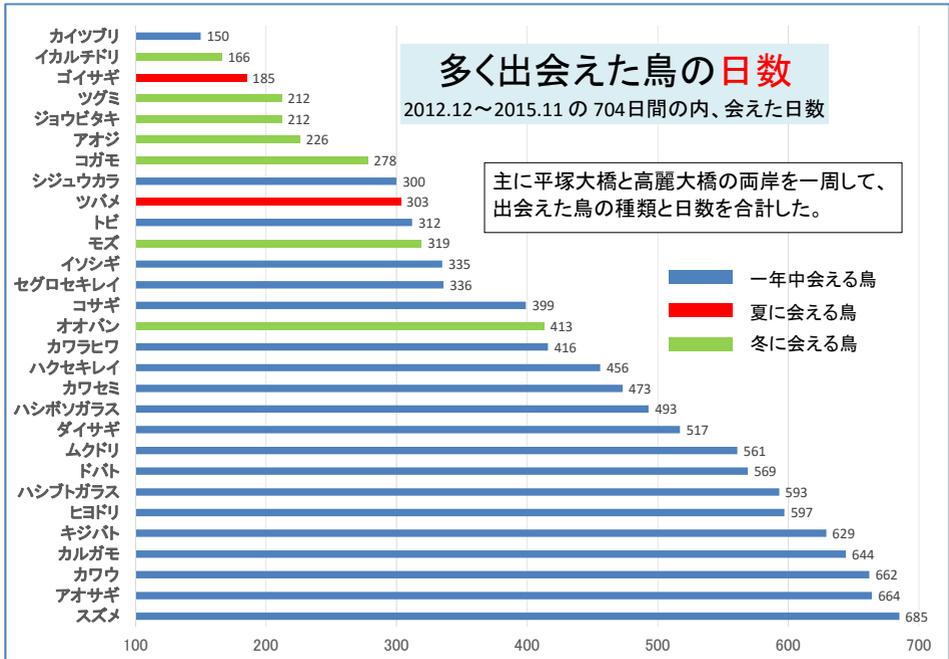
ガビチョウー
[チメドリ科] (25cm)。
[年間]。留鳥。全体に茶色で目の後ろにまで白い部分が伸びている。外来種の飼鳥が逃げ出し、方々で住み着いてしまった。鳴き声が特徴的だが、鳴き真似に注意。④



☆☆ 鳥名の索引 ☆☆

種名	ページ	科名
アオサギ	7	サギ科
アオジ	17	ホオジロ科
アオバズク	10	フクロウ科
アオバト	10	ハト科
アカガシラサギ	5	サギ科
アカハラ	15	ヒタキ科大型ツグミ類
アマサギ	5	サギ科
アリスイ	12	キツツキ科
イカル	18	アトリ科
イカルチドリ	8	チドリ科
イソシギ	8	シギ科
イソヒヨドリ	15	ヒタキ科イソヒヨドリ類
ウグイス	16	ウグイス科
ウミネコ	5	カモメ科カモメ類
エナガ	17	エナガ科
オオタカ	9-10	タカ科
オオバン	7	クイナ科
オオヨシキリ	16	ヨシキリ科
オシドリ	3-4	カモ科淡水ガモ類
オナガ	19	カラス科
オナガガモ	4	カモ科淡水ガモ類
カイツブリ	2	カイツブリ科
カシラダカ	17	ホオジロ科
ガビチョウ	20	チメドリ科
カルガモ	2-3	カモ科淡水ガモ類
カワアイサ	4	カモ科アイサ類
カワウ	2	ウ科
カワセミ	11	カワセミ科
カワラヒワ	18	アトリ科
カンムリカイツブリ	2	カイツブリ科
キアシシギ	8	シギ科
キジバト	10	ハト科
キセキレイ	13	セキレイ科セキレイ類
キレンジャク	14	レンジャク科
クイナ	7	クイナ科
ケリ	8	チドリ科
ゴイサギ	5	サギ科
コガモ	3	カモ科淡水ガモ類
コゲラ	12	キツツキ科
コサギ	6	サギ科
コシアカツバメ	12	ツバメ科
コチドリ	7	チドリ科

種名	ページ	科名
コムクドリ	19	ムクドリ科
ササゴイ	5	サギ科
シジュウカラ	16	シジュウカラ科
シメ	18	アトリ科
ジョウビタキ	14	ヒタキ科小型ツグミ類
シロハラ	15	ヒタキ科大型ツグミ類
スズガモ	4	カモ科海ガモ類
スズメ	18	スズメ科
セグロセキレイ	13	セキレイ科セキレイ類
ダイサギ	6	サギ科
タゲリ	8	チドリ科
タシギ	8	シギ科
チュウサギ	6	サギ科
チョウゲンボウ	10	ハヤブサ科
ツグミ	15	ヒタキ科大型ツグミ類
ツバメ	12-13	ツバメ科
ドバト	11	ハト科
トビ	9	タカ科
ノスリ	9	タカ科
ノビタキ	15	ヒタキ科小型ツグミ類
ハクセキレイ	13	セキレイ科セキレイ類
ハシビロガモ	3	カモ科淡水ガモ類
ハシブトガラス	19-20	カラス科
ハシボソガラス	19	カラス科
ハヤブサ	10	ハヤブサ科
バン	7	クイナ科
ヒドリガモ	4	カモ科淡水ガモ類
ヒバリ	12	ヒバリ科
ヒヨドリ	13	ヒヨドリ科
ヒレンジャク	14	レンジャク科
ベニマシコ	18	アトリ科
ホオジロ	17	ホオジロ科
ホシハジロ	4	カモ科海ガモ類
マガモ	2	カモ科淡水ガモ類
マヒワ	18	アトリ科
ミサゴ	9	ミサゴ科
ムクドリ	19	ムクドリ科
メジロ	17	メジロ科
モズ	13-14	モズ科
ヤマガラ	16	シジュウカラ科
ユリカモメ	5	カモメ科カモメ類

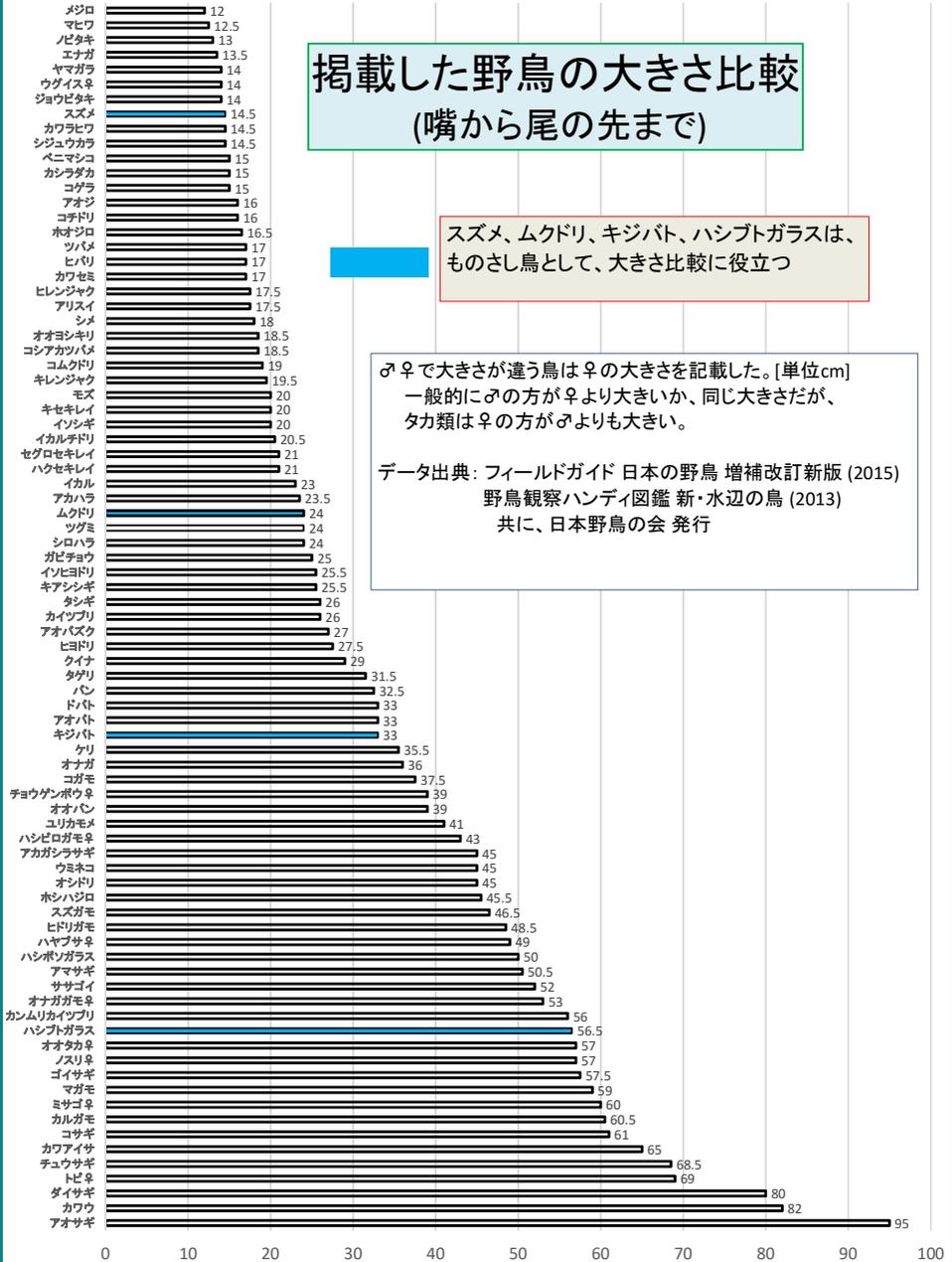


掲載した野鳥の大きさ比較 (嘴から尾の先まで)

スズメ、ムクドリ、キジバト、ハシブトガラスは、ものさし鳥として、大きさ比較に役立つ

♂♀で大きさが違う鳥は♀の大きさを記載した。[単位cm]
一般的に♂の方が♀より大きいか、同じ大きさだが、タカ類は♀の方が♂よりも大きい。

データ出典：フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂新版(2015)
野鳥観察ハンディ図鑑 新・水辺の鳥(2013)
共に、日本野鳥の会 発行





おわりに

この冊子の制作に当たっては、「株式会社ブリヂストン・ちょボラ募金」に多大なる資金援助をしていただきました。この援助なくして、冊子の完成はあり得ませんでした。ここに記して、感謝の意を表します。



また、当ネットワークからの暖かいサポートがあったとはいえ、野鳥の初心者である筆者が、曲がりなりにも、独力でこのような冊子を書き終えることができたのは、これまで、こまたん(バードウォッチングのグループ)、すいたん(水曜探鳥会)の皆様にお世話になったからであり、心から感謝しています。

2016年(平成28年)4月発行

発行： 金目川水系流域ネットワーク

URL <http://www.asahigs.co.jp/kaname-net/>

表紙挿絵： 岩本 勲

執筆・写真・編集： 佐藤 道夫

(本誌掲載内容の無断転載をお断りします)

金目川水系は、丹沢山塊に端を発し、金目川(かなめがわ)、水無川(みずなしがわ)、鈴川(すずかわ)などいくつもの川が合流し、最後は花水川(はなみずがわ)となって、相模湾に注ぐ、流域面積 180 ㎢ 平方メートルほどの水系です。この流域には、まだまだ美しい水と緑、多種多様な生物、豊かな自然空間が残されており、人々の生活を支えながら、独自の歴史・文化を育んできました。

近年、川や水環境への関心の高まりとともに、流域では、訪れる人も増え、多くの市民、団体・グループが様々な分野で多彩な活動をしています。流域レベルでの交流や横断的な情報交換などを進める場として、「金目川水系流域ネットワーク」が、スタートしました。

金目川水系流域ネットワーク
代表世話人 柳川三郎